氏　　名	：	李　　原翔
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 226 号
学位授与年月日	：	平成２６年３月１４日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	中国につながる児童生徒をめぐる異文化適応および教育課題 ―文化間移動と心理的適応の視点から―
論文審査委員	：	（主査）　教授　佐野　秀樹 （副査）　教授　朝倉　隆司　　教授　堀田　香織 教授　保坂　亨　　教授　林　安紀子

学 位 論 文 要 旨

近年、外国につながる子どもの増加に伴い、教育現場にとって日本語を母語としない児童生徒に対する日本語指導と生活適応指導が重要な教育課題となっている。しかし、外国につながる子どもの生活背景や学習経験とそれにまつわる問題などに関する研究が不十分であるため、多くの課題が生じている。そこで、本研究では，量的研究と質的研究を通して、中国につながる児童生徒の来日事情の多様化と複雑化、異文化適応の課題、日本語学習の問題、進路動機、異文化環境における保護者の子育て課題などを明らかにすることを目的とする。

本研究は４部構成でⅠ部第１章、Ⅱ部第２～５章、Ⅲ部第６～９章、Ⅳ部第 10 章から成る。

Ⅰ部第１章「問題背景と本研究の目的」では、研究の背景、問題提起、関連研究の枠組み、研究目的を説明した。データから読み取れる在日外国人や日本語指導が必要な児童生徒の現状、在日中国人や中国につながる児童生徒の現状を概観し、日本語学習指導や学齢超過、また高校進学の問題を提示した。移民の受け入れに長い歴史をもつ欧州諸国の移民２世、３世の失業と社会的不適応の問題を踏まえたうえ、外国につながる児童生徒への教育支援の意義を論述した。

Ⅱ部「中国から来日した児童生徒の実態と適応問題に関する調査」では、質問紙調査を通して中国から来日した児童生徒の実態と適応問題を明らかにし、その関連要因を検討した。第２章では、中国から来日した児童生徒の来日経緯、文化間移動による生活面と学習面、学校生活適応などの変化を明らかにした。第３章では、中国から来日した児童生徒の異文化適応感と学校適応感の要因を見出し、適応課題と関連要因の影響について検討した。第４章では、言語学習に関する学習者の学習信念や学習動機、また学習方法などの心理的要因を見出し、言語習得と学力の関連を検討した。第５章では、中国につながる生徒の進路動機の様相を明らかにし、進路動機の形成に関する関連要因を検討した。

Ⅲ部「文化間移動における子どもと親の適応課題に関する質的研究」では、面接法・エスノグラフィー・事例研究の方法を用いて、中国につながる子どもおよび保護者（母親）の異文化適応課題を明らかにし、その関連要因を検討した。第６章では、中国帰国者三世の文化的アイデンティティの形成、とりわけ民族的帰属意識と関連要因を明らかにした。第７章では、中国につなが

る子どもの不適応問題を取り上げ，文化間移動の視点から問題の要因と教育支援のあり方を検討した。第８章では、中国につながる子どもの呼び寄せ事情および子どもを母国から呼び寄せる家族が抱えている問題について聞き取り調査と面接を実施した。調査の結果を事例にまとめ、中国の子育て事情との関連をふれながら、子どもの呼び寄せにおける親子関係の形成、子どもの学力と進路の問題について考察を行った。第９章では、自由記述式の質問用紙を用いて、中国出身の保護者を対象に異文化環境における子育て意識を調査した。異文化環境における子育ての視点から調査結果を整理し、保護者の立場から子どもの教育や学校教育活動、日本人の保護者とのかかわりの課題をまとめた。

Ⅳ部第 10 章「総まとめと考察」では、第 1 章から第 9 章までの内容を踏まえて、異文化環境における子どもと保護者の適応課題、外国につながる子どもの受け入れにおける支援体制作りの課題について総合的な考察を行った。本研究は、中国から来日した児童生徒の主な適応課題として、言語習得・文化受容という異文化間移動の課題、学業達成・進路選択など学生生活領域に関する発達上の課題、また親子関係や友達関係形成・ストレス対処などのソーシャルスキル領域に関する心理課題という三つの課題を示した。それぞれの課題は、互いに影響し合いながら、異なるプロセスで展開していくことも明らかになった。来日年齢、滞在期間、自己効力感などの個人要因、親の理解や精神的サポート、親子関係などの家庭要因、日本人の子どもとの人間関係やクラス・学校活動の参加上状況といった学校環境の要因、編入制度や学習・進路支援などのサポート体制の要因が個人の異文化適応の度合に及ぼす影響について考察した。

以上のことから、外国につながる子どもの教育問題について提言を行った。外国につながる子どもを日本社会の構成員として位置づけ、彼らのもつ多様な文化的背景を活かしながら、日本語学習をはじめ、学習や進路といった学力保障と進路保障を図る支援体制が必要である。外国につながる子どもの教育支援について、受け入れ体制や学習支援の充実のほか、子ども自身の異文化理解能力、適応意欲と適応ストレスへの対処能力の向上、教育に関する保護者の積極的な関わりの促進、さらに日本人の子どもの外国人の子どもに対する受容が今後の課題となる。外国につながる子どもの教育問題は、日本の教育全体の課題として考えるべきであろう。